

学 校 名：京都府立菟道高等学校
校 長 名：澤木正彦
所 在 地：京都府宇治市五雲峰4-1
電 話 番 号：0774-33-1691
研究担当者：遠藤吉郎

都道府県名	京都府	番 号	26
教育委員会担当者名	大島浩樹		

(1) 研究主題

「確かな学力」を保障するカリキュラムの開発」

- ・課題1：到達目標を明確化した年間指導計画の作成
- ・課題2：授業実践研究を踏まえた探究型学習の単元構想

(2) 研究のねらい

平成15年度の研究によって、生徒の学習方略の変化が学力低下と学力の剥落化の一要因であることが解明された。また、生徒の学習方略の選択がテストの形式と関連していることも明らかになった。従って、生徒の学力低下を防ぎ、学力の剥落化を阻止するためには、高校でのテストの形式を改善しなければならないと言える。しかしながら、教育内容さえも大学入試の動向に左右されている現状にあっては、大学入試の出題形式が大幅に変更されない限り、高校でのテスト形式を抜本的に改善することは困難であると言わなければならない。それ故、生徒の学力低下と学力の剥落化を防止し、転移性のある「確かな学力」を保障するためには、別途代替的な方策を考案する必要がある。

本校の研究のねらいは、第一に、「修得主義」の立場に立脚して「目標標準評価」への改善を進め、高校生として最低限修得すべき基礎的で基本的な学力をすべての生徒に保障しようとするところにあり、第二に、生徒の内発的な学習動機を重要視する観点から、「探究型」の学びの保障を通じて、理解し、思考し、判断する、発展的な学力の育成を図ると同時に、「自ら学び自ら考える」自主的で自発的な学習態度を培おうとするところにある。

(3) 研究組織【別添資料参照】

(4) 3年間の計画

平成15年度

研究主題の設定を目的とする予備的な理論研究と並行して、以下の教育実践を実施する。

- ア 到達目標と評価規準の明確化を図る教育実践
 - (ア) シラバスの作成と活用
- イ 知的探究心や学習意欲の向上を図る教育実践
 - (ア) 高大連携の推進
 - (イ) 体験的学習の創造

研究の主題を確定し、研究主題を一層具体化された課題として提示するために、以下の予備的な理論研究を行う。

- ウ 学力実態調査研究
 - (ア) 「学力」概念の確定と「学力モデル」の考案
 - (イ) 「学力低下」論議の整理と大学生の学力実態の把握
- エ カリキュラム開発研究
 - (ア) 学習方略の選択とテスト形式との関連
 - (イ) カリキュラム開発の方向性の確定
- オ 教育評価研究
 - (ア) 教育評価と内発的動機づけとの関連
 - (イ) 教育評価改善の方向性の確定

平成16年度

ア 平成15年度の実践を反省し、上記の予備的研究を踏まえて設定された課題を実施する。

イ 必修科目に関して、一学期終了時まで、単元毎の「到達目標」（評価規準）を明確化した「年間指導計画」を作成する。

ウ 夏期休業期間終了時まで、全国各地の授業実践を研究し、「探究型」のカリキュラム計画を一単元開発する。

エ 「中間報告書」を作成する。

平成17年度

ア 「目標標準型年間指導計画」に基づく授業の実践と反省

イ 「探求型」カリキュラム構成による授業の実践と反省

ウ アンケート等による研究評価の集約

エ 「研究報告書」の作成

1 学校の概要

(1) 学校の特徴

京都府立菟道高等学校は、昭和60年4月、京都府の高校制度改革に伴い、先進的で斬新な教育の推進を意図して、開校された比較的新しい高校である。本校は、京都市以南の地域が一望でき、四季折々の草花に恵まれた宇治市東部の素晴らしい自然環境の中に位置している。近隣には平等院や万福寺などの名勝旧跡が多数存在しており、歴史的景勝地としても日本有数の地域であって、文化遺産にも恵まれている。

本校の教育方針は、「さとく」「さやかに」「たくましく」という校訓に象徴されるように、「個人の尊厳」を中核に据えた「知」「徳」「体」の調和的な発達にあり、集団の中で切磋琢磨することを通じて、自己陶冶に努める姿勢を培い、未来への確かな見通しと国際感覚を身につけた創造的で心豊かな人間を育成しようとしている。開校後、進路実績においても、部活動等の実績においても、著しい躍進を遂げ、平成16年度に創立20周年を迎えることになっている。

(2) 学校概要

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	356	9	402	10	378	10	1136	29
	科								
	計								
定時制									
計		356	9	402	10	378	10	1136	29

(3) 学校の学習意欲・学力向上に関するこれまでの取組

習熟度別の学級編成・講座編成による「個に応じた」授業展開、進路希望別の学級編成による授業展開
習熟度別・進路希望別の教育課程の編成

週4日7限授業、土曜日学習、長期休業中補習、学習合宿、模擬試験（全員受験）、補充授業等による学力の回復・定着・伸張

個人面談、保護者面談、各種説明会、ガイダンス等を通じた、きめ細かな学習指導や進路指導

環境教育、情報教育、性教育、人権教育、勤労体験学習等の各種の体験学習やボランティア活動の取組

学校教育改革組織〔T21会議〕の編成

教育課程の再検討と再編成

学校行事等の見直しによる授業時数の確保【別添資料参照】

(4) 教育課題

高校生として最低限必要な基礎的で基本的な教育内容を確実に修得させることによって、発展的で習熟化した学力修得の前提基盤を保障する。

生徒の学習意欲を喚起し、知的探究心の向上を図る。

2 研究の概要

3 本年度の取組

(1) 研究の実際

教育実践に関しては、以下の取組を実施した。

大学・各種研究機関と連携して、生徒の科学技術に対する興味・関心を高め、数学・理科等の分野における知的好奇心や知的探究心の向上を図った。【別添資料参照】

ア サイエンス・パートナーシップ・プログラム(S P P)の取組

イ 原子力・エネルギーに関する教育支援事業(A E E)の取組

宇治地域の人やモノとの触れあい(I: interact)を学習活動の中心に据えた、特色のある(U: unique)、楽しい(J: joyful)、独自の体験学習[U J I学]を通じて、生徒の学習意欲を喚起し、心豊かな人間性の涵養に努めるとともに、普遍的(U: universal)で、若者らしい(J: junior)知恵(I: intelligence)の修得を図った。【別添資料参照】

ア お茶摘み体験

イ 保育実習

ウ 沐浴教室

エ 源氏物語ミュージアム見学

シラバスの作成は、教師には学習指導上の目標を意識化することで、授業方法の質的改善を促す効果があり、生徒には学習の拠を与えることで、学習習慣の確立を促す効果があると考え、第一学年の生徒を対象に、学習目標を明確化したシラバスを作成して、年度当初に配布の上、年間の学習内容に関する説明を行った。

研究主題の設定を目的とした予備的作業として、以下の理論的研究を行った。

学力の実態を解明し、学力に関する論議を有意なものにするためには、議論の前提として「学力」の概念を確定することが必要であり、教育学上未確定の「学力」概念の学的解明という極めて困難な作業が学力論議の前提条件となる。「学力」概念の規定と学力モデルの考案に関しては、文部科学省を中心とする近年の教育評価の改善の動向を踏まえて、学力評価論の今日的形態の二典型である「到達度評価」の形成と展開の過程で生成してきた三つの学力モデルを参考に、新しい学力モデルの考案に着手したところである。

今次の「学力低下」論議が大学生の学力論議に端を發しており、大学生の学力低下については、論争の比較的早い段階で合意に達していたこともあって、高校生の学力実態分析との関連を視野に入れながら、「学力低下」論争の整理を行って、大学生の学力実態の把握に努めた。

学習方略とテスト形式との因果関係を実証的に分析した近年の教育心理学上の知見から、テスト形式が学習者の学習方略の選択に大きな影響を与えることが解明され、テストの出題形式が「空欄補充型」である場合、「暗記」を目的とした記憶中心型の「浅い」学習方略の選択が促されることが明らかになった。

「学力の保障と人格の形成」を究極的な学校教育の目的として措定した上で、「カリキュラム」を「学習の履歴」と捉えるカリキュラムの再概念化を踏まえて、カリキュラム構成の基本的な方向性を検討した結果、アトキンの所謂「工学的接近」と「羅生門的接近」の統合化を図るという結論に到達した。即ち、この試みは、学力の「基本性」の部分を「完全習得学习型」の学習によって保障し、学力の「発展性」の部分を「探究型」の学習によって保障しようとするカリキュラム構成の試みであると言える。

教育心理学上の知見によれば、競争状況は内発的動機づけを低下させ、競争による学習の動機づけは、一見学習パフォーマンスを促進させるように見えたとしても、生徒の将来的な学習意欲を低下させている可能性があり、教育方法としての競争と評価方法としての相対評価は再考を迫られている状況にあることが明かになった。一方、「評価構造」と内発的動機づけの関連に関する先行的研究から、「到

達度評価」が学習者の内発的動機づけを向上させ、思考過程を重視する態度を育成し、低学力者の学習を促進する可能性を持っている一方、「個人内評価」が学習者の「コンピテンス」を向上させることが解明された。

「到達度評価」が学習者の内発的動機づけの促進と学習意欲の喚起に有効であり、「個人内評価」が学習者のコンピテンスの向上に有益であるのであれば、学校における教育評価の方法は到達度評価と個人内評価を統合化した方向に改善される必要がある。敷衍すれば、「目標準拠評価と目標自由評価」、「外的評価と内的評価」、「結果の評価と過程の評価」、「量的評価と質的评价」を教育評価を構成する二つの契機として把握した上で、その統一の様相を実践的に開示することが求められているのである。

以上の研究を踏まえ、次年度以降の研究主題と課題を設定することができた。

(2) 教材、資料等の作成状況

S P P・A E Eに関しては、理科や進路指導部等で独自の資料を作成し、生徒の興味・関心を喚起することに努めた。

U J I学に関しては、国語科・家庭科等の教科・科目でプリント教材を作成し、事前・事後の授業で活用して、学習の定着化を図った。

シラバスに関しては、新教育課程の第一学年配当科目について作成し、第一学年の生徒全員に配布した。

4 研究に対する評価

(1) 研究の成果

体験的な学習等に関しては、生徒は比較的意欲的に取り組んでいるが、その成果については、未だ解明されていない。一方、研究主題の実践に関しては、次年度以降のことであり、この成果の分析についても次年度以降の課題であると言える。

(2) 問題点及び今後の課題

幾つかの文献に依拠して、シラバスの特質に関する研究を進めた結果、シラバスは学生に科目の選択を大幅に認めるようなカリキュラムを前提にした教育サービスについての一種の双務的契約書であり、学生が当該科目を選択する際に拠とする授業の設計図であって、授業の種類が多岐にわたる日本の学校教育には馴染まないものであることが明らかになった。そこで、次年度以降は、シラバスに替わって、「到達目標」(評価規準)を明示した「年間指導計画」を作成しようと考えている。

高大連携による授業の展開や作業的・体験的学習の推進は、生徒の知的好奇心の触発や学習意欲の向上に一定の有効性を持っている。しかしながら、一旦喚起された生徒の興味・関心や知的探究心が、持続性を持ち、思考力や判断力の育成に資する確固とした学力の一部となって、以後の学力の発達と人格の形成に寄与するものとなるためには、その学習が無目的な単なる経験の集積に終止してしまったり、一回生起的な単独の試みで終息してしまうのではなく、一つの纏りを持った教授=学習過程の中に正しく位置づき、一定の教育的意図(「ねがい」や「ねらい」)の実現を目的とするカリキュラム計画の中で正確な位置を占めている必要がある。換言すれば、知的探究心の向上を意図する単元の開発が不可避的に求められていると言える。

思考力・判断力の育成を射程に入れた「探究型」授業の単元開発を進めるに際しては、授業の質を根本的に決定する要因は学問内容に関する教員の理解度であるという「内容主義」の意識を強く持つ一方、「教授学的思考」の重要性については未だ十分に認識されているとは言えない高校教員の現状(小学校・中学校と比較して、高校での授業実践事例が少ない所以であるが)に留意しつつ、小・中・高・大連携の観点からも、高校における実践事例だけでなく、広く小学校・中学校・大学等、異校種の授業実践を研究した上で、単元開発を構想する必要があるであろう。